

安全への提言

|||||



ラフカディオ・ハーンが遺した至言 「質素で善良，簡素を愛す」

はな やす しげ お
花 安 繁 郎[†]

1894（明治27）年1月27日、ジャーナリストで日本文化の紹介者であるラフカディオ・ハーン（日本名：小泉八雲）は、熊本第五高等学校において、職員・生徒を対象に、「極東の将来」と題して講演を行っている。「日本への忠言」とも言うべきこの講演は、以下の言葉で締めくくられている。

「将来、日本が偉大な国になれるかどうかは、九州魂あるいは熊本魂，すなわち質素で善良，簡素を愛し，無用な贅沢，浪費を憎む心をいかにして保ち続けるかにかかっている」という結びである。

明治27年と言えば、日清戦争が勃発した年でもあり、日本はまだまだ貧しく、欧米列強に追いつけ追い越せの富国強兵政策を、国をあげて推し進めていた時代である。

このことを、私は横浜国立大学退任時の最終講義で取り上げた。すると、多用の中、聴講のためにわざわざ仙台から来学された同期生から、講義中に最も興味を引かれたのはハーンによる忠言であり、このことに関するコメントとして、「そんな時代に日本の将来について、列強の中の外国人がこのような想いを持っていたのかと実に新鮮な驚きであった」と、ある雑誌に寄稿された随想を送ってくれた。

随想ではさらに続けて、「しかし、なぜ九州魂，熊本魂なのか。……私はここに東北魂，宮城魂を入れても、またびったりくるように思う。……明治から続く、貧しくとも凛とした気概や思いやりの心を忘れていなかった日本はどこにでもあったように思う」と述べている。まったく彼の言うとおりでである。

ドイツの著名な社会学者・経済学者であるマックス・ヴェーバーが、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を著したのは20世紀初頭（1904-05年）である。西洋近代資本主義を発展させた原動力を、主としてカルビニズムにおける宗教倫理から生み出されたキリスト教的禁欲の精神と、天職理念を土台とした近代合理的生活態度であるとし、大きな反響を呼び起こす契機となった論著である。

私には、ハーンの語る、「質素で善良，簡素を愛し，無用な贅沢や浪費を憎む心」が、マックス・ヴェーバーが唱える、「キリスト教的禁欲の精神と、近代合理的生活態度」に無理なく重なり合うように思える。期せずして、文学者であるハーンと社会学者であるヴェーバーが、同様の視点に立っていたことは不思議という外ない。

ヴェーバーは、同論著最終部において次のように述

べている。資本主義の発展をみた段階では、

「今日では、禁欲の精神は……この鉄の檻から抜け出してしまった。ともかく勝利をとげた資本主義は……この支柱をもう必要としない」と。

さらに、「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味合いは取り去られていて、今では純粋な競争に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない」と。

こうした文化発展の末に現われる人たちは、「精神のない専門人（Fachmensch ohne Geist）、心情の無い享楽人（Genussmensch ohne Herz）」であろうと警告もしている。

100年以上も前に語られた、ラフカディオ・ハーンによる日本への忠言や、マックス・ヴェーバーによる警告は、不幸にして現実のものとなってしまった。

今日、私たちは何をなすべきであろうか。やはりラフカディオ・ハーンの言葉に倣い、「質素で善良，簡素を愛し」、慎み深く凛として生きてゆく精神に立ち返ることが、まずは大切ではなかろうかと思う次第である。

現在は100年に一度の世界同時不況と言われるが、近代資本主義の発達をみて以降、最初の世界大恐慌が起きたのは1929（昭和4）年である。

安全問題は、いつの時代にもその時の経済活動と産業技術の動向に左右されるものではあるが、我が国の労働安全衛生保護対策の発展の歴史から言えば、工場法が明治44年に公布され、大正5年に施行はされたものの、その具体的細則については定められていなかった。それらがようやく「工場危害予防及び衛生規則」として制定されたのは、世界大恐慌が始まった、まさにその昭和4年であったことはご存じであろうか。

私たちの先輩が、当時の経済大不況下にもかかわらず、このように産業安全衛生向上のために立ち向かったことに対して、畏敬の念を抱くものである。

今回の大不況の嵐はいまだに収まらず、先行き不透明な状況にあるが、今こそ、ラフカディオ・ハーンの「質素で善良，簡素を愛する」精神を基に、今日ますます重要な課題となっている安全衛生について、新たな時代を切り拓いてゆくことが、私たちに与えられた重大な使命であると考えられるものである。

著者の花安繁郎氏は昨年11月26日にご逝去され、この原稿は残念ながらご遺稿となってしまいました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

[†] 元 横浜国立大学 安心・安全の科学研究教育センター：〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-5